

浜松市立看護専門学校

令和7年度（令和8年度入学生）

一般入学試験（2期）

国 語

《 注 意 事 項 》

- 1 試験監督の指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
- 2 解答用紙には受験番号と氏名を必ず記入してください。
また、受験番号を直下のマーク欄にマークしてください。
- 3 解答の際は、各問題で選んだ解答番号をマークしてください。
- 4 試験中に問題冊子の落丁・乱丁に気づいた場合は、手を挙げて、試験監督に知らせてください。
- 5 試験中の途中退室は原則として認めません。
ただし、気分が悪くなった場合やトイレへ行きたくなくなった場合は、手を挙げて、試験監督の指示に従ってください。
- 6 問題冊子及び解答用紙の室外への持ち出しは禁止します。
- 7 試験終了後、問題冊子及び解答用紙はすべて回収します。

第1問 次の文章は、高田明典『難解な本を読む技術』（光文社新書2009）からの一文です。本文をよく読んで、以下の問いに答えなさい。

読書の技術の最初の段階は、本を選ぶことです。ここで間違つと、元も子もなくなります。できの悪い本をどんなに真剣に読んで、そこから得られるものはほとんどありません。むしろ悪い影響のほうが圧倒的に大きいと言えるでしょう。しかし、本を選ぶということは、①ある意味で矛盾した営みであることに注意が必要です。なぜなら、その内容を知らないにもかかわらず、それを推測して選ぶなければならないからです。

また、たとえ名著と呼ばれているものであっても、必ずしも自分自身にとってそれが有意義であるかどうかはわかりません。人生経験や、直面している問題、興味の方向性などによって、本の意義は様々なものとなるからです。人は、自分にとって必要である知識をよく吸収することができますが、そうでないものを理解して吸収するには困難を感じます。

したがって、「自分にとって最も好ましい本」を選ぶということが、とても重要であると言えます。なおかつそれは、自分で選ばなくてはなりません。

私は職業柄、本のリストを提示して、「これを読み」と推薦（もしくは強要）することがありますが、そのとき常に内心忸怩たるものを感じています。本来は、読者（学生）が自分で選書することが重要だと考えているからです。人に薦められた本は、その「薦められた」ということにおいてつまらなさの色を帯びます。自分で渴望し発見した本と「薦められた」本との間には、決定的な差異が存在します。本を選ぶ喜びは、読書の重要な側面の一つであり、その機会を学生から奪う行為となるリストの提示はできるだけ避けたいのですが、指導効率という側面から、なかなかそうも言つてはいられないというのが実情です。

しかし、本書の読者は、②そのような束縛からは解放されている場合が多いでしょうから、自ら選書し、その読書の喜びを実感することを強く勧めます。選書は読書の重要な段階であり、選書しているときはとても楽しい時間であるはずですよ。

ある分野の知識を得ようと考えたときに、最初に行くべきことは「書店の棚を見ること」です。本書ではそれを「棚見」と呼びます。できるだけ大きな書店に行き、その分野の棚に並ぶ本を、横から順に見ていきます。まずは本のタイトルだけを眺めるつもりで見ているが、少し気になったものがあれば、その本を手にとって目次を眺めます。タイトルや著者名を覚えようとしたりする必要はありません。ただ漫然と眺めていくだけで十分です。

- A この「入れ物＝弁当箱」は、すごく大きなものだったり、逆にすごく小さいものだったりもします。
- B 棚見では、自分の頭の中に「知識の容器」を作ることが目的としています。
- C これからそこにいろいろな知識を入れていくことになるわけですが、そのためには、まずしっかりとした入れ物を作っておく必要があります。
- D 知識の容器とは、たとえるならば弁当箱のようなものです。

たとえば「哲学」という名前の弁当箱を作ろうとすれば、それはものすごく大きなものになりますし、その中には仕切り板で小分けされた区分がたくさん存在しています。想定する分野が広い範囲にわたる場合には、そのための入れ物を作るのにも結構時間がかかります。棚見をすることによって、自分が作ろうとしている弁当箱の名前や、大きさや、おおまかな仕切りの構造などが次第にわかるはずです。

ここで言う「弁当箱」のような知識の入れ物を作らずに、本を読み始め知識を得ようとするのは、とても△⁽³⁾ホウであり、また、非効率的な作業となる可能性があります。自分が知りたいと考えているものが、どの分野の範囲に含まれているものなのかを△⁽⁴⁾予め知っておけば、無駄な本を読まなくて済みます。

まず、棚見の手順を以下に示しておきます。

- ①ある分野の棚を、横から順に眺めていく
- ②気になるものがあれば、手にとり、目次を眺める
- ③さらに気になるものがあれば、パラパラとページをめくり、本文を眺めてもよい。ただし、この段階で本を購入することは勧められない
- ④いったん全部のタイトルを見たら、もう一度最初からタイトルを見直していく

この①から④を、適当な回数繰り返します。この段階で慌てたり、急いだりする必要はありません。頭の中の「弁当箱」は、ゆっくりとしか形づくられないということに注意してください。可能であれば、複数の大きな書店で、棚見を繰り返す行うのがよいでしょう。できれば、△⁽⁵⁾有名な大型書店などで棚見をすることが好ましいと言えます。例外はありますが、有名書店の「棚」は、とてもよくできていて、眺めているだけでその分野の全体像がおぼろげながら見えてきたりします。棚見に習熟してくると、△⁽⁶⁾一瞥しただけで「この棚はトドい」、もしくは「この棚は素晴らしい」ということがわかったりもするようになります。

それらの棚見を繰り返すうちに、「なんとなく、その分野の全体像が見えてくる」瞬間が訪れるのを、ただひたすら待ちます。その分野の全体像が見える、とは、その分野が主として持っている「問題」がおぼろげにわかり、さらに、その問題を解決する方法に応じて細分化された下位分野の構成図がなんとなくわかったということを指します。

そして、次の段階に進みます。

- ⑤その分野の全体像を、簡単にスケッチしてみる

ここで「スケッチ」とは、その分野の構成図を描くという程度の意味です。もちろん、そのスケッチは、完全なものにはなりません。しかし、自分が知りえた範囲内でスケッチを試みるのが重要です。

ある分野の全体像のスケッチが描けたらさらに細分化して、その中に描かれている下位分野のうち、自分が最も興味のあるものを二重まるなどで囲っておきましょう。それが、購入する本より明確化された「分野」となるはずです。

この明確になった「分野」は、高度に専門的な分野であっても構いません。このとき大事なのは、自分の興味の中心をしっかりと見据え、〈6〉「タ」ヲ「ウ」しないことです。たとえば「経済学」に興味があり、棚見をした結果、「消費経済学」の分野が自分の興味の対象だとわかったとしましょう。そのとき、「いきなり消費経済学の分野の本を読むのは難しそうだから、経済学の入門書から始めてみようかな」などと考えることがあります。これは、決してよい判断ではありません。「自分が知りたいこと」が議論されている本を、最初から購入すべきです。私たちの多くは、「X」の勉強法に慣れてしまっているので、そのような誤った判断をすることがありますが、それは「読書の技術」としては間違っています。自分の興味の対象から離れてはなりません。まず「知りたいこと」が書いてある本から読み始めるのが、最も効率的な方法です。もしも、読み始めた段階でわからない概念や用語に遭遇したら、入門書の必要性が生じるわけですから、そのときに、もう一段階広い分野（たとえば「経済学」など）の入門書や概説書を買えばよいといえます。人は、必要な知識を習得するのは得意ですが、必要ではない知識を習得するには、大きな困難を感じるという性質を持っています。「必要になったときに、必要な知識を習得する」というのが最も効率的な方法です。

(中略)

読みたい本の方向性がある程度固まってきた段階で、自分が読む本のタイプを選ぶとよいでしょう。

「(7)外部参照が必要な本」と、そうでない本のどちらを選ぶかは好みの問題です。「外部参照が必要ではない本」とは、その一冊だけで完結しており、他に知識や参考書などを必要としないタイプの本のことです。その分だけ楽であるように思われるかもしれませんが、読み込む作業は集中して行われなければならない、かなりの忍耐力が必要です。「わからない」となると、もうどうしようもなく、入門本や解説本をかたっぱしから読むという暴挙に出たりしても、結局のところその本に良らなくては解決できない場合がほとんどです。

一方、「外部参照が必要な本」を理解するという営みは、明るく、活動的なものになります。ネットを検索したり、図書館や書店に足しげく通い、関連本を眺めたりするという行動を伴うからです。私はこのタイプの本はあまり好きではありませんが、作業している間は楽しいと感じます。

「*閉じている本」と「*開いている本」のどちらを選ぶのかも基本的には好みの問題ですが、「開いている本」を読んで理解するほうが難しい場合が多いでしょう。「開いている本」を読む場合には、読者が前向きに思考を展開し、自分の考えを構築していくという作業が欠かせないからです。「閉じている本」ではそのようなことはあまり必要なく、著者の考えをじっくりと追跡していくことが作業の中心となります。

(中略)

分野があらかじめ決まり、次に読むべき本のタイプも決まった段階で、いよいよ購入する本を決めます。「そんなに真剣に選書する必要があるのか」という考え方は間違っています。私たちの時間は限られています。「読むべきでない本」を読んでしまうことによる時間の損失は、私たちが思っている以上に^(B)甚大です。それは、単にその本を読むのに要した時間だけではなく、その本の悪い影響から脱するために必要となる時間も含まれるからです。ソフトウェアエンジニアの世界でよく言われる格言に、「*ゴミが入ればゴミが出る」というものがあります。どんなによく出来たシステムであっても、間違ったデータが入力されれば、間違った結果が出る、という意味です。私たちの思考や精神の仕組みも同じです。頭にはできるだけ「ゴミを入れないようにする」ことが^(C)カギコウなのであり、いったんゴミが入ってしまったら、それを排除するために多大な労力と時間が必要になってしまいます。「ダメな本なら読まないほうがいい」というのでは不十分で、「ダメな本を読むのは、巨害あって一利なし」です。世の中には、ダメな本による影響で、回復不可能なダメージを受けている人がたくさんいます。「^(D)本を選ぶのに選びすぎるという事はない」というほうが圧倒的に正しいと言えます。

*閉じている本：著者が自らの結論を明確に持ち、その結論に向けて論を構築している本

*開いている本：読者の意見構築を期待して、著者が自らの考えをいくらか隠蔽している本

*ゴミが入ればゴミが出る：一般には Garbage in, garbage out. と表現されている格言。

問一 傍線部〈a〉～〈c〉の漢字と同じ漢字を含むものを、①～⑤よりそれぞれ一つ選びなさい。

- 〈a〉 ムボウ
- ① シンボウして作業を続けた。
 - ② 森へボウケンに出かけよう。
 - ③ 彼のインボウに陥れられた。
 - ④ 犯人は国外にトウボウした。
 - ⑤ 国土を敵からボウエイする。

- 〈b〉 ダキョウ
- ① 他社のキョウリョクを奪る。
 - ② 優勝争いがカキョウに入る。
 - ③ 飲食料品をナイキョウした。
 - ④ 平和をキョウシエしている。
 - ⑤ 同じ分野でキョウゴウする。

- 〈c〉 カンシウ
- ① カンダイな処置に感謝する。
 - ② カントクの指示が伝わった。
 - ③ 村のカンシウに反発した。
 - ④ カンソウの手術を予約した。
 - ⑤ 深呼吸で緊張をカンワする。

問二 漢字の読みをひらがなで書いたとき、傍線部〈A〉・〈B〉の読みと最初の一字が共通するものを、①～⑤よりそれぞれ一つ選びなさい

- 〈A〉 予め
- ① 興る
 - ② 強ち
 - ③ 詠む
 - ④ 暫く
 - ⑤ 諮る

- 〈B〉 甚大
- ① 暴露
 - ② 宗家
 - ③ 匿名
 - ④ 干満
 - ⑤ 尽力

問三 傍線部(1)「ある意味で矛盾した営み」とあるが、どういう意味で矛盾しているのか、その説明として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① できの悪い本を真剣に読むと、かえって自分に悪影響を与えてしまうという意味。
- ② 本の内容を知らないのに、その内容の良し悪しを判断する必要があるという意味。
- ③ 本を選んで読んだ後に、その本を選ぶべきではなかったことに気付くという意味。
- ④ ある本を選ぶということは、それ以外の本を選ばないのと同義であるという意味。
- ⑤ 本を読む前に抱いていた印象と読んだ後の印象は、かなり違っているという意味。

問四 傍線部(2)「そのような束縛」の説明として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① リストの本を読んでレポートを書くように指導されること。
- ② 面白い本でも他人から薦められるとつまらなく感じること。
- ③ つまらないと分かっている本を読まなければならないこと。
- ④ 自分で本を探して発見するという機会を奪われていること。
- ⑤ 自分が読みたいと思っている本を他人から禁じられること。

問五 四角枠内の文A～Dを適切な順序に並べ替えたものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① B | D | A | C
- ② D | C | A | B
- ③ B | D | C | A
- ④ D | B | C | A
- ⑤ B | C | A | D

問六 傍線部(3)「有名な大型書店などで棚見をすることが好ましい」とあるが、その理由として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 棚に置かれている本の数や種類が豊富であることが多いから。
- ② 落ち着いて棚見ができるほど広い空間があることが多いから。
- ③ 棚の位置が探しやすいように配置されていることが多いから。
- ④ 書店が適切な本を目立つように配置していることが多いから。
- ⑤ 各分野の棚に置かれた本の配置が適切であることが多いから。

問七 空欄 X に入る語句として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 積み上げ式
- ② 振り返り式
- ③ 先取り方式
- ④ 詰め込み式
- ⑤ ゆとり方式

問八 傍線部(4)「外部参照が必要な本」の説明として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 内容が高度であり、理解するために基礎的な学習が前提となるタイプの本のこと。
- ② 本を読むだけでなく、実際に身体を動かすことで理解できるタイプの本のこと。
- ③ 一冊だけでは話が完結せず、シリーズとして続編が出版されるタイプの本のこと。
- ④ 同じ著者の本を読み比べることで、ようやく全貌を理解できるタイプの本のこと。
- ⑤ 情報が不足しており、他の書籍などで補完しなければならないタイプの本のこと。

問九 傍線部(ら)「本を選ぶのに選びすぎることではない」と筆者が考える理由として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 自分にとって良い本であるかどうかを判断する能力は、時間をかけて本を選ぶことで培われるものであるから。
- ② 人生の長さを考えると、一人の人間が読める本の冊数は限られており、ダメな本を読む時間ももたないから。
- ③ ダメな本を読んで頭にこびりついてしまったゴミを取り除くために、多大な労力を必要とすることになるから。
- ④ 本を選ぶのに要する時間がいくら長くても、ダメな本を読了するのに要する時間よりもずっと短くて済むから。
- ⑤ ダメな本を読んでしまうと、その後で良い本を読んだときにダメな本の凶容を連想させられることになるから。

問十 本文の内容と合致していないものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 自分にとって有意義な本を探す場合、必ずしも世間で名著とされている本を選ぶなければならないわけではない。
- ② ある分野の知識を得ようとする場合、「棚見」を繰り返せば、その分野の全体像がおぼろげに見えてくるようになる。
- ③ 自分の興味の対象を特定したら、難しそうに思えても、その対象について議論されている本から読み始めるべきである。
- ④ 難解な「開いている本」を理解するためには、じっくり読んで著者の考えを追跡していくという作業が最も重要になる。
- ⑤ 私たちの思考や精神の仕組みには、ソフトウェアエンジニアにおけるデータ入出力のシステムと、共通点が見られる。

第2問 次の文章は、檀ふみ『父の縁側、私の書斎』（新潮文庫2006）からの一文です。
本文をよく読んで、以下の問いに答えなさい。

写真がある。

時は晩秋、ところは懐かしの「離れ」の前の庭である。

危なっかしい足取りで、私が竹馬の稽古をしている。兄の助けを借りてやっとうさうさう竹馬に乗ったところなのだろう。私のすぐかたわらで、兄が笑っている。

離れの入り口のドアにもたれて、妹がそれをぼんやりと見ている。おとなしく自分の順番を待っているのかもしれない。

おかつばの妹の頬はぶつくりくくれており、幼児の面差しをどめている。小学校に入っただけというところだろうか。とすると、私は小学校二年生、兄は四年生ということになる。

この写真を撮ったのは父である。父以外には考えられない。なぜなら、その日の一連の記憶は、父とともにあり、ほかに大人の影はいつきいなかったから。

私たち兄妹が子供の頃、父は「火宅の人」の真ただ中にいた。石神井の家に落ち着いていた日はそうなかったはずである。しかし、記憶を手繰ってみると、父と過ごした時間が、次から次へと驚くほど濃いシルエットで浮かびあがってくる。

寝たきりの次郎兄がいたから、もともと出不精の母が家を留守にすることは、ほとんどなかったといっている。だが、その母の姿より、父との思い出のほうが、くつきりと心に刻まれているのはなぜだろう。細くはあるが途切れることなく子供たちに寄り添っていた、線のような母親の存在の上に、父はまるで、ボタツボタツと墨汁でも垂らしていったようなあんばいなのである。

竹馬の日も、①その「墨汁の一滴」だった。

なぜ、「その日」だったのだろうか。植木屋さんが置いていった竹に、ちょうど傾合いのものがあつたからかもしれない。買い物の途中で、ふと思立ったのかもしれない。父のすることは、いつも②トウトツだった。

とにかく、その日、父は子供たちを庭先に集めて、竹を切ったり割ったりしながら、何やら作りはじめた。

小刀で削る。キリで穴をあける。じれったい思いで待った記憶はないから、多分あつという間のことだったのだろう。

できあがつたものを、ヒョーイと、まず父が上手に飛ばして見せてくれた。青い空に、竹の羽根がフワリと浮かび上がった。それが「竹とんぼ」というものであること、自分たちの子供時代にはこういうもので遊んでいたことを、父は教えてくれた。

父のようにはなかなかうまく飛ばせなかった。何べんためしてみても、どんなに力をこめて手と手をこすり合わせても、とんぼの羽根は、すぐにへたく々と足もとに落ちてきてしまう。

ヒョーイと飛ばした爽快感を憶えていないのは、きっと飛ばしかたを③会得しないうちに、次のものに心を奪われてしまったからだろう。

「次のもの」が、竹馬だった。竹とんぼに続いて、父が作ってくれたのである。私たちは④

れに熱狂した。奪い合うようにして乗り回った。

写真は、そんな子供たちの姿を面白がって、父が撮ったものである。自分が引き起こした大騒ぎに、心の中でニツコリと頷いていたのかもしれない。

「チチは、ああ見えて、すつこくア^①だったよね」

滅多に帰ってはこなかったが、帰ると必ず、子供たちを巻き込んで何かをしたがった父を思い出してそう言うと、「そうかしら」と、母が首を傾げた。

「私と顔を合わせるのが気詰まりだったんじゃないかしら」

なるほど、だから、父と何かした記憶のどこにも、母の姿がないのかもしれない。

兄妹で、^②コケシしたからだろう。竹馬は、あまり上達しないうちに壊れてしまった。

父がいれば、きつとすぐに直してくれただろう。竹馬は一度と元通りにならず、私たちも竹馬名人になれなかったところをみると、そのあと、父は長いこと家を留守にしていたらしい。私たちが竹馬のことを忘れてしまうくらい長いこと……。

竹とんぼと竹馬は、楽しく不思議な一日の記憶として、心に残っている。父が子供を遊ばせるために何かを作ったのは、あれが最初で最後ではなかったらうか。

といて、父が不器用だったり、面倒くさがり屋だったというわけではない。

父は器用な人だった。実用の人というべきか。家事でも大工仕事でも、お金の計算以外なら、たいていのことは上手にこなした。

いちど、下の兄が、図工の宿題で悪戦苦闘していたとき、父が面白半分に手伝ったことがあった。ビニールの紐で何か作れという宿題ではなかったらうか。父がたちまち小さな可愛い椅子を作った。黒い針金の枠に、緑のビニール線が、ピチッと寸分の狂いもなく編み込まれている。そのまま、人形の椅子として売れそうな完成度だった。

「だめだよ、チチさん。こんなにうまくできてちゃ、先生に疑われちゃうよ」

と、^③結局「手伝い」にはならなかったように思う。

ものを自分で作るのが好きだったせいか、「できあい」品に凝るといふことは、あまりなかった。美術品とか骨董とか、時計とかカメラとか、「あれが欲しい」と身をよじるようにしている姿は一度も見たことがない。もともと、濫費の大王様なのであるから、本当に欲しいと思ったら、身をよじる前に買ってしまっているだろう。

だが、家はあばら家、庭木は茂りつばなし、その中を、子供たちと犬猫が、泥だらけになって駆けずり回っているのである。「季朝の壺でもなでまわして、古人の夢に思いを馳せたい」なんて望むことに、^④どれだけの意味があつたらう。

子供たちにも、できあいのものをあてがうことはなかった。つまり、子供のオモチャは、庭、泥、石、花、虫……、自然がいちばん。人形やままごとの道具など、いっさい買ってもらえなかった。

父のお供で近くの街に買いだしに出掛けると、帰りのバスの窓から、オモチャ屋さんのショーウィンドーが見える。色とりどりのオモチャは、ぴかぴかと華やかで楽しそうで、ああいうものをいっぺんでいいから持っみたいというのが、私の願いだつた。

けれども、^⑤父にそういうおねだりはできなかつた。父は子供と遊んだり笑ったりするのが大好きだったが、一方で、いつも嵐をはらんでいる人でもあつた。どこに^⑥逆鱗を秘

めているかわからない。子供心に、そんな父が怖くてならなかった。

ただひとつだけ、ちゃんとしたオモチャがあって、⁽⁵⁾ そのおかげで私たちは救われていた。

積み木である。父が念入りに選んだのだろうか、それとも誰かに作らせたのだろうか。みっしりと重い、無垢の木でできた立派な積み木だった。四角、三角、長方形などがあって、順番さえ間違えなければ、一辺が三、四十センチほどの真四角の箱の中にピッタリとおさまる仕掛けになっていた。積み木の詰まった箱は、大きな四角い塊だった。子供一人では持ち上げられないくらい重い。

その積み木を、背の高さよりも高く積んで遊んだ。建造物は、建設途中で毎度、大音響を発して倒壊し、うっかりその部材の一片に直撃でもされようものなら、涙が出るほど痛かった。だが、その迫力が楽しくて、部屋いっぱいにならべて、将棋倒しをすることもあった。

ときどきは、夢の家を作って、そこに着せ替え人形を住ませた。本物の人形は買ってもらえなかったが、安い紙の着せ替え人形なら、お小遣いの中でなんとかまかなえたのだ。

積み木は、子供たちの手垢で薄汚れていた。しかし、まるみを帯びた角と、すべすべと滑らかな表面が、ずっしりとした重みとともに、なんともいえぬ安心感を手のひらに与えてくれた。確かさのようなものが、重さのなかに感じられた。

その積み木は、しかし、いつの間にか私たちの前から消えていた。私たちが学校に行っている間に、母が親戚に譲ってしまったらしい。別れを告げる暇もなかった。というより、積み木がなくなっていたこと自体に長いこと気がつかなかった。

「あれは、どこへやったの？」

と、母に訊いたのは、甥や姪ができてからである。

甥や姪にも同じようなものを持たせてやりたいと思ったが、市販の積み木のほとんどは色とりどりのプラスチックで、たまに木製のものがあっても、赤、青、黄色と表面がどカピカピにコーティングされている。輸入玩具のなかに、やっとな彩色のほどこされていない、無垢の積み木を探し当てた。しかし、幼児の体に合わせてだろう。ひとつひとつが、思うものよりずっと小ぶりで、ずっと軽い。丸や円柱形など、私たちの積み木箱には入っていなかった形も揃っていて、楽しそうといえば楽しそうだったが、⁽⁶⁾ 何だか違う気がしてならなかった。これは、安全で美しいオモチャである。私たちが持っていたのは、オモチャを超えた何か、ちよっと意地悪で扱いにくい、でも⁽⁷⁾ ガンシヨウな、「道具」のようなものではなかったか。

兄や妹と、ああでもないこうでもないといみんな知恵を借りながら「お片づけ」した日を思い出す。三角と三角、長四角と長四角。長さを合わせ、横幅を考えながら箱にしまわなければ、かならず何個か箱からはみ出してしまふ。すべてがおさまるべき場所におさまり、ピシリと蓋を置くことができたときの、さきやかな達成感。

最後に、あの蓋を閉めたのはいつだったろう。もう二度と積み木で遊ぶことはない、そのとき知っていたのだろうか。

何にでも最後の時はある。子供はそうした小さな「卒業」をいくつも経験して、大人になっていく。そうした卒業に、式はない。証書も出ない。ずつとあとになって、ふと振り返ってみたとき、⁽⁷⁾ 「ああ、いつの間にか卒業していたんだな」と気づくだけである。

問一 傍線部〈a〉～〈c〉の漢字と同じ漢字を含むものを、①～⑤よりそれぞれ一つ選びなさい。

- 〈a〉 トウトツ
- ① 選挙にトウトツに行く。
 - ② 彼女の話はコウトウト無稽だ。
 - ③ 伝統的な技をトウトツシユウする。
 - ④ 住所のトウトツロクが必要だ。
 - ⑤ 二つの部門をトウトツゴウした。
- 〈b〉 コクシ
- ① コクモツの価格が上昇している。
 - ② イツコクも早く納品してほしい。
 - ③ 彼は写真の人物とコクシしている。
 - ④ 彼女はコクサイ的な賞を受賞した。
 - ⑤ 駅構内にコウコクを掲示した。
- 〈c〉 ガンジヨウ
- ① 事業の権利をジヨウトする。
 - ② ジヨウダンを真に受ける。
 - ③ 相手にジヨウケンを出した。
 - ④ ジヨウレン客で賑わっている。
 - ⑤ 波乱ハンジヨウの人生を歩む。

問二 漢字の読みをひらがなで書いたとき、傍線部〈A〉・〈B〉の読みと最初の一字が共通するものを、①～⑤よりそれぞれ一つ選びなさい。

- 〈A〉 会得
- ① 埋没
 - ② 遂行
 - ③ 獲物
 - ④ 渦中
 - ⑤ 圧勝
- 〈B〉 逆鱗
- ① 激昂する
 - ② 詐称する
 - ③ 達観する
 - ④ 示唆する
 - ⑤ 凝視する

問三 傍線部(一)「竹馬の日も、その『墨汁の一滴』だった」とあるが、この表現から読み取れる内容として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 母は常に寝たきりの兄に寄り添っていたため、母との思い出は「細い線」のように希薄だったのに対して、父は写真を撮ったり竹馬を作ったりして積極的に関わってくれたため、どの思い出も濃い「墨汁の一滴」として残っている。
- ② 家に滅多にいなかった父も、常に子どもに寄り添っていた母も、子に対する愛情は「途切れない線」のように均等であったが、父が作った竹馬が素晴らしい出来だったため、「墨汁の一滴」のように強く印象に残った一日であった。
- ③ 主に子どもの世話をしていた母は、日々を穏やかに連ねる「途切れることのない線」のような人だったが、父は珍しい「竹馬」を作るなどして忘れがたい記憶を刻み、母との思い出を「墨汁の一滴」のように上塗りする人であった。
- ④ 母はいつも子どもたちのそばにいて「途切れない線」のような存在であったが、父は家にいる時間が少ない分、その一瞬や一日が強く印象に残り、竹馬の日も「墨汁の一滴」のように、そんな父との鮮烈な記憶として心に刻まれている。
- ⑤ 母子の間には細いながらも「途切れない線」があるため、母は何もしなくても子どもとつながっていたが、家を留守にしていた父は竹馬などを作り、子どもの興味を惹くことで「墨汁の一滴」といえる濃密な時間を作り出そうとした。

問四 空欄アに当てはまる語句として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 無愛想
- ② 子煩悩
- ③ 親分肌
- ④ 内弁慶
- ⑤ 能天気

問五 傍線部(2)「結局『手伝い』にはならなかったように思う」とあるが、その理由として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 父が手際よく短時間で作品を作り上げてしまったため、兄が本来自分で作るべき時間がほとんど無くなってしまったから。
- ② 父は自分の技術を誇示しようと、兄の作と言えないほど介入したため、先生に疑われるような出来になってしまったから。
- ③ 父が主体で作ったことで、あまりに完成度の高い作品となり、子どもが作ったと見なされないものとなってしまったから。
- ④ 父の手による作品はあまりに整いすぎていて、大人の面白さが反映されない、つまらない出来栄えとなってしまったから。
- ⑤ 父が面白半分に手伝ったことで売り物のような作品となり、兄が考えていた完成図とは異なるものとなってしまったから。

問六 傍線部(3)「どれだけの意味があつたらう」とあるが、この表現から読み取る筆者の心情として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 質素な家にも関わらず、美術品を持つ意味を、大人になってからようやく知ることができたという父に対する後悔。
- ② 家の経済状況では、欲しいものは手に入らないのに、美しいものを求めることに意味を持ち続ける父に対する諦観。
- ③ 余裕のある暮らしではなかったが、「古人の夢」に思いを馳せることに人生の意味を見出していた父に対する共感。
- ④ 暮らしがぶりからすれば、美術品を愛でるような願いを持つことには現実的な意味がなかったという父に対する皮肉。
- ⑤ 貧しい暮らしの最中でも、感性の豊かさが失われないように、購入した美術品の意味を考えていた父に対する尊敬。

問七 傍線部(4)「父にそういうおねだりはできなかった」とあるが、その理由として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 父の性格が予測不能で、どこで怒り出すかわからず、怖れを感じていたから。
- ② 父は家計に厳しく、子どもには買い与えない傾向があるのを知っていたから。
- ③ 父は手づくりを推奨したため、オモチャは自分で作るように教えられたから。
- ④ 父に物をねだるのは、家の経済的事情を考えて良くないことと判断したから。
- ⑤ 父に甘えること自体が苦手な性格で、物をねだる風習が家庭になかったから。

問八 傍線部(5)「そのおかげで私たちは救われていた」とあるが、具体的にはどのようなことか。最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 経済的に豊かではなく、憧れていた華やかなオモチャを買ってもらえなかった不満を、積み木という贅沢な品によって解消できたこと。
- ② 父が選んだ「できあい」の品ではない積み木に、厳しきの裏にある深い愛情や思いやりを感じ取り、心の支えとすることができたこと。
- ③ 積み木があることで、自然の中で遊ぶだけでは得られなかった、形を作り出すという喜びと創造力が得られ、成長が実感できたこと。
- ④ 父が自分の与えた積み木で、子どもたちが楽しく遊んでいる姿を見ていると機嫌が良くなるため、家庭の秩序と安定が保たれたこと。
- ⑤ ぴかぴかのオモチャは買ってもらえなかったが、本物の手ぶたえのある玩具が一つでもあったことで、みじめにならずにすんだこと。

問九 傍線部(6)「何だか違う気がしてならなかった」とあるが、その理由として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 筆者が幼少の頃に遊んでいた積み木は重くて迫力をもっていて、「遊び道具」を超えた存在感があったが、新しい市販の積み木は、色とりどりで軽く、美しく進化をしていることに自分の時代との差を感じたから。
- ② 筆者にとって、昔遊んでいた積み木は危険さを含みながらも確かな重みや手応え、現実感をもつ「道具」であり、見た目に美しく安全であっても本物の確かさを欠いた現代の「オモチャ」に対して違和感を抱いたから。
- ③ 重たくて扱いにくい「道具」のような積み木で遊ぶことで、筆者は危機意識が持てたが、今の積み木の小ささと軽さでは、現代の子どもたちを過剰に危険から守る結果になっていることに異を唱えなくなったから。
- ④ 筆者が遊んでいた「道具」のような重みのある積み木には、父の価値観や家族の思い出が宿っていたのに対し、今の積み木にはそうした個人的なぬくもりが感じられず、単なる「オモチャ」に見えてしまったから。
- ⑤ 素朴な荒々しさを持つ重たい積み木に馴染んでいた筆者からすると、新しい積み木は、安全性を大切にして作られてはいるものの、既製品としての整いすぎた美しさが父の好みとは異なっていると感じたから。

問十 傍線部(7)「『ああ、いつの間にか卒業していったんだ』と気づくだけである」とあるが、この心情の説明として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 遊んでいた積み木の喪失に気づかないまま日々が過ぎたように、知らぬうちに終えてしまっていたことに、あとになって静かに気づくことへ哀惜を抱きつつも、それをしみじみと受け止めている。
- ② 母が何も言わず積み木を譲ってしまったことに対して、自分も気づかなかったので仕方がないと納得しながらも、あの積み木を手放した瞬間に自分の子ども時代も終わってしまったと痛感している。
- ③ 思い出の詰まった積み木がなくなったことを通して、子ども時代が遠く過ぎ去ったことをしみじみと感じ、特に関心を持てなくなった自分を大人になった証として、静かに誇らしく受けとめている。
- ④ かつて夢中になっていた積み木遊びの記憶を懐かしく思い出しながら、あの頃に味わった子ども時代の楽しさを、大人になった今もなお求め続けている自分に気づき、一抹の寂しさを感じている。
- ⑤ 積み木が母の手によって手放されてしまったため、自分が気づかぬうちに物事が進んでいくことに驚き、思い出の品との別れが突然に訪れることに対して後悔の入りまじった感情を持っている。

